

ミカン園の栄養実態調査

岡島量男・岩本数人・金川英明

(熊本県果樹試験場)

熊本県下の主要産地ミカン樹の栄養実態を把握するため、昭和35年から4～5年ごとに栄養診断調査を行っており、52年にその5回目の調査を実施したのでその概要を報告する。調査は主要ミカン産地の代表的ミカン園を任意に選出し、1園から5～10本の樹を選び、赤道面の不着果春枝から100枚の葉を採葉し分析に供した。土壌は0～10cmの深さの土を園内5ヵ所から採土し、これを混合したものを分析に供した。調査点数は35年が11市町村の46園、39年が24市町村の84園、44年が22市町村の123園、48年が26市町村の143園、52年が38市町村の121園であった。調査対象はウンシュウミカン(早生、普通)、および川野ナツダイダイである。

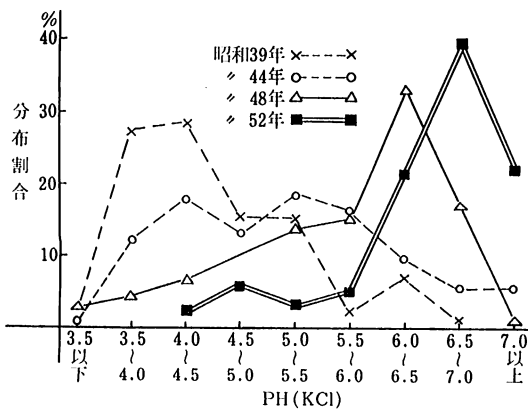
1. 結果および考察

1) 葉中の多量要素含量については、48年と52年の2回だけ分析を行ったが、52年は48年に対して、K, Ca, Mgの含量が高く、Pの含量は低く、Nの含量はほとんど変わらなかった。また、N含量が2.8%以下の園が、48年に16.1%、52年に16.6%あった。

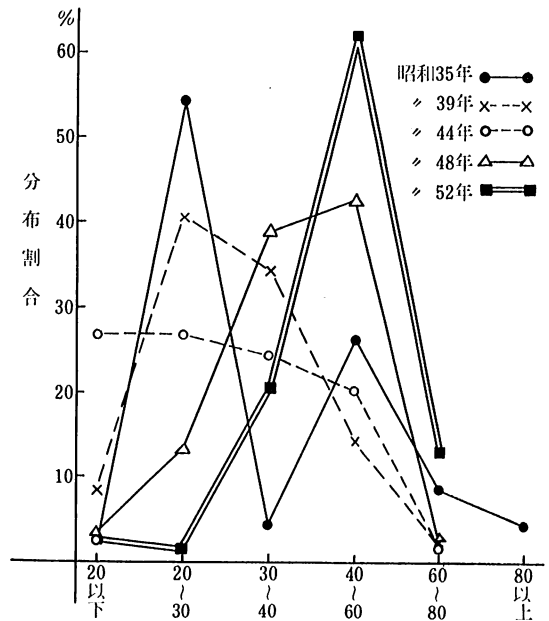
2) 葉中の微量元素成分のなかで、Bは35年から分析を行っているが、年を追うごとに葉中含量が増加し、30

ppm以下の園が35年に56.6%もあったが、52年には41%と少なくなった。Mnは39年より分析を行ったが、あまり大きな変動はみられない。しかし含量が10ppm以下の園が常に10%以上を占めており、注意が必要である。銅については、48年から分析を行っているが、含量が5ppm以下の園が10%以上を占めており、また全体的に減少の傾向もみられ注意が必要である。

3) 土壌の化学性は、置換性石灰含量が調査ごとに高まり、52年には20meを上回る園もみられる。土壌反応もpH(KCl)で、39年には5.0以下の園が58%もあったが、52年には8%台に減少し、7.0以上の園が22%もあった。ミカン園の表層は石灰過剰の傾向が進みつつあり、今後は下層改良に重点をおくことが望まれる。



第1図 土壌反応 (PH) の推移



第2図 葉中ホウ素含量の推移 (ppm)